

T. イーグルトンのD. H. ロレンス解釈

——『文学批評とイデオロギー』から『文学理論入門』へ——

吉 村 宏 一

はじめに

20世紀後半、とりわけ70年代以降、文学批評の領域において新しい理論が次々登場してきた。もちろん、その後それらの理論は相互に影響を与え合いながら、さらに次の段階へと展開していった。この状況は80年代にはピークを迎えるが、その後遺症とでも言える状況が90年代から現在にかけてまだ続いていると考えてもいいだろう。言いかえれば、21世紀の冒頭である今では、20世紀のほぼ4分の3世紀にわたってヨーロッパ文明に大きな影響力を持っていたモダニズム、フェミニズム、マルクス主義といった「大いなる価値体系」が崩れ、それに代わって相対的な価値が重視される状況が現出しているとも言えるだろう。

こういった哲学や批評の領域での大変動は、当然のことながら個々の作家や詩人たちの研究方法にも大きな影響を及ぼしてきた。例えば、ロレンス研究ひとつを考えてみても、現在どのテーマを最も重要な問題として取り上げるのか、そのこと自体がすでに問題となるような事態に陥っているのかもしれない。つまり批評の方向そのものが見えない事態であるとも言えなくもない。このような場合何をなすべきなのだろうか。もちろん、その問いに対する答えは多々あるだろう。筆者には、混乱している場合、まずこれまでの先人たちの仕事を振り返って検討することが何よりも重要ではないかと思われてならない。特に、「大いなる価値体系」が崩れたと言われているが、本当に崩れ去ったのかどうかを見てみる必要がある。ロレンスに対する批評の流れを見ても、リー

ヴィシズム批評、フェミニズム批評、マルクス主義批評など、それぞれ、その背景に「大いなる価値体系」を持ち、それに依拠してロレンスを評価し批評してきた。そしてある「主義」に基づく批評に関して論評が行なわれる場合、その「主義」に対して抱く論者の先入観から発せられるセクト的な硬直した論が多い。そのため読者の側も、読む以前からすでに結論が見えていると、ある種の先入観をもって受け取めようとする傾向があった。ところが細かく見れば、同じ「主義」と言われているものに基づく発言でも、時代によって異なるし、論者によってもかなりの違いがある。それゆえ、「大いなる価値体系」に基づく批評において、ロレンスの場合はどのように捉えられてきたのか、その点をまず再確認することが現時点ではなによりも緊要の作業ではないかと思われる。

例えば、ロレンスに関してのマルクス主義批評と言っても、具体的にどのような形で行なわれてきたのであろうか。そして何が問題となってきたのであろうか。現時点のように、多様な批評が混在している状況であればあるだけ、そういった問題点を整理しその意味するところを現時点で捉え直すことが必要な作業のように思われる。これまで、筆者はC. コードウェルやR. ウィリアムズなどマルクス主義の立場に立ってロレンスを取り上げ論究してきた批評家たちを検討してきた¹⁾。もちろん彼らの見解は必ずしも同じではない。T. イーグルトンの場合も当然先の二人とは異なっている。さらに、マルクス主義への依拠という基本的な点では変わらないにしても、執筆時期によって、強調するところも異なるし、取り上げる問題も異なっている。特にイーグルトンの仕事は「大いなる価値体系」が崩壊していく過程で行なわれたが故に、彼の試みは現在の混迷状況に対する批判というだけでなく、「大いなる価値体系」を復元しようとする壮大な試みとも受け取ることができるのではなかろうか。

1 『文学批評とイデオロギー』:「有機体論」への挑戦

これまでのところイギリスにおけるマルクス主義批評と言えば、C. コードウェルとR. ウィリアムズが代表的な例だと考えられるが、イーグルトンの視点からすると、二人の仕事は必ずしも満足すべきものとは言えないようであ

る²⁾。特にコードウェルに対しては、彼の理論は「まとまりがなく、ひどく荒っぽい」が、そのようになった原因は、コードウェルが活躍していた頃、彼には頼るべき先達がおらずヨーロッパからの思想的影響もほとんど受けていなかったところにあると、イーグルトンは考えている。確かにスターリニズムが大きな力を持ち、理想主義や観念主義が幅を利かせていた時代にあっては、コードウェルのごときマルクス主義批評が登場しても仕方がなかったのかもしれない。もう一人の先達、R. ウィリアムズについては、イーグルトン自身大きな影響を受けた先輩であり、その偉大さを理解しながらも、ウィリアムズの問題点を容赦なく暴こうとしている。その作業は、イーグルトンにとっては、先達を乗り越えイギリスの地にマルクス主義の文学批評を根づかせるための大切な試みであったと思われる。

イーグルトンのウィリアムズ批判は多岐にわたっている。ウィリアムズが活躍を始めた頃、F. R. リーヴィスを中心とするスクルーティニ派が大きな影響力を持っていたため、ウィリアムズは「共同体、伝統、倫理的価値判断、それと『生』というものの持つ総体性」³⁾を重視する傾向を持っていただけでなく、「個人のアイデンティティ」の問題も重要な問題として意識するようになっていた。つまり、リーヴィスたちが主張してきたマシュー・アーノルドやカーライルを経てロレンスに至るロマン主義的な文化の伝統がウィリアムズにも引き継がれているところがあると、イーグルトンは考えている。

ここで具体的に1976年に出版された『文学批評とイデオロギー』を取り上げて、イーグルトンのロレンス解釈を見てみたい。この書でイーグルトンはロレンスについて、第4章「イデオロギーと文学形式」の第9節において5ページほどだが論究している。量的には少ないが、内容的には、イーグルトンが第1章「文学批評のイデオロギーにおける変遷」以降述べてきた内容がその背景に控えているため、それまでの議論を踏まえて読まないと、話がやや抽象的でイーグルトンの主張が何なのか捉えづらいところがある。特に第9章のみをイーグルトンの「ロレンス論」として取り出した場合、それはかなり難解なエッセイと化すのではなかろうかという気がする。

* 「有機体論」というイデオロギー

難解なところがなきにしもあらずだが、イーグルトンの「ロレンス論」そのものを、部分的ではあるが具体的に引用しながら筆者なりの解釈を加えて、彼のロレンスの捉え方を見てみたい。その論は次のように始まっている。

本書で取り上げてきた作家たちの中で、D. H. ロレンスだけが唯一プロレタリアート出身であって、社会的、美学的観点から考えても、まるまる血肉そのものから最高に有機体的であったと言える⁴⁾。

この文のキーワードは言うまでもなく「有機体的」という言葉である。もともとイーグルトンは、第4章「イデオロギーと文学形式」において、イギリスの文化や社会を19世紀以来支えてきた「有機体」というイデオロギーこそマルクス主義批評にとって挑戦すべき最大のターゲットだとみなし、アーノルド以下ロレンスまでの9名の作家たちを取り上げている。イーグルトンがこのように「有機体論」にこだわったのは、これまでのマルクス主義批評における大いなる先達であるウィリアムズの批評が「有機体論」の影響を大きく受けていることが、大いに不満であったからだと思われる。「有機体論」とは、古くは、『フィードラ』においてソクラテスが「スピーチ」(speech)を「生きている有機体」(a living organism)と比較した時のことをプラトンが言及し、それによって始まった概念であると言われている⁵⁾。その後、その概念をドイツやイギリスのロマン主義者たちが愛用することになった。イギリスでは、この「有機体論」はコールリッジ以降、カーライル、アーノルド、ラスキンなどに引き継がれていく。さらにその論は、19世紀の作家や思想家たちがヒューマンイズムの思想と結びつけたため、リベラル・ヒューマンイズムの形をとって、イギリスという国の文化や伝統を支える説得力を持つイデオロギーと化したのである。そのイデオロギーは、イギリスという国そのものを一種の有機体的組織と捉え、その資本主義体制を維持、擁護する強力な力を持つことになったと、イーグルトンは「有機体論」の持つ柔軟性、多様性について述べている。

「有機体論」の柔軟性、融通性について、イーグルトンは一例として亡命者であるJ. コンラッドを取り上げ、説明している。コンラッドの父はロシアのポーランド支配に反逆した愛国主義者であり、民族主義者であった。コンラッドは、父から、異民族の支配下にある祖国こそが「有機体」的な生命体である統一体なのだという信念を植えつけられた。その上、彼は船乗りであった。それは船という「有機体」的な共同体の一員であったことを意味する。共同体においては秩序を重んじなくてはならない。そのため勤労、忠誠、服従といった価値を重んじる。しかし他方、共同体に対して反発するロマン主義的な個人主義の意識をコンラッドは押さえつけることができない。イーグルトンは、さらにコンラッドの特徴として、社会的な理想や理念は、結局、自己中心的な幻想にすぎず、歴史は意味のない繰り返しであるとする「観念的虚無主義」を抱きながらも、コンラッドは他方「社会有機体論」を信じていたと、解釈している。このような矛盾を胎みながらもコンラッドは小説において「有機体」的世界の構築を目指したのである。イーグルトンは、19世紀後半から20世紀初頭の作家たち、G. エリオットやT. S. エリオット、H. ジェイムズなども確かに「有機体」的な世界をそれぞれの小説や評論において作り上げてきた。例えば、T. S. エリオットの「伝統」という考えは「ヨーロッパの文化的伝統の有機体的統一」を再度試みたものであると言えるし、H. ジェイムズは、社会的な次元での「有機体」的な世界の可能性など全く考えもしなかったが、小説の世界を現実の世界と完全に切り離れた形で、「有機体」的な力を持つ一つの領域を創造したのである。イーグルトンの解釈では、これまで挙げた作家たちは、「美学的な」視点から見ると、「有機体」的であった。しかし「社会的な」視点から見ると、必ずしもそうではなかったということになる。

「社会的、美学的に」見てもロレンスは最高に「有機体」的であると、イーグルトンは述べていたが、彼が取り上げた9名の作家のうちロレンスのみがプロレタリアートの出身であったため、「社会的」という表現が加えられたと思われる。しかしそれは、プロレタリアートがなぜ「有機体」的であるのかという議論を引き起こすことになる。

この議論は、R. ウィリアムズが主張していた「文化と社会」⁶⁾との関連で展開されている。イーグルトンは次のようにロレンスについて説明している。

ロレンスは「文化と社会」のロマン主義的ヒューマニズムの伝統を直接20世紀に引き継ぐ者であり、彼の小説は、今世紀、産業資本主義に対して行なわれた文学上の強力な批判のうちでも最強のものである。イタリア、ニューメキシコ、産業化される以前のイギリスと、さまざまな場所に彼が捜し出した有機体的な世界に深くかかわり、そこから批判の矢が放たれた。それは、比喩的な形で、小説という形態そのものを用いて行なわれたのである⁷⁾。

イーグルトンは、ロレンスを「文化と社会」のロマン主義的ヒューマニズムの伝統を引き継ぐ者であると断定しているが、ここで「文化と社会」のロマン主義的ヒューマニズムと言っているのは、ウィリアムズが1959年に表わした『文化と社会』で取り上げた、E. バーク以降の文学を通して表れているイギリスの文化と社会の伝統である。この文化と社会の伝統は19世紀のイギリスのロマン主義的伝統であるが、そこには、イギリスという国そのものの全体性を守ろうとする保守的で実に民族主義的な傾向が顕著に見られる。それを支えているのは、有機体、共同体、全体性、伝統重視といったイデオロギーである。このような保守的なイデオロギーは、そのうちに、カーライル、ラスキン、モリスなどの社会主義的色彩の強い動きと結びついていく。イギリスの労働運動がすでにラスキンたちの思想の影響を大きく受けていたこともあって、政治的な立場が保守と急進とに分かれているにもかかわらず、根底的には両者とも「有機体論」に基づく同じようなイデオロギーを信奉していたことになる。イーグルトンは、こういった「有機体」的なイデオロギーを労働者階級に持ち込んだ草分けはウィリアムズの『文化と社会』であると述べ、ウィリアムズの解釈に疑問を呈している。そしてウィリアムズは、『文化と社会』において取り上げた作家たち、なかでもカーライル、アーノルド、ロレンスについて、彼らが反動

的であるにもかかわらず、自分の信じる「社会主義ヒューマニズムの大義」のために偏った解釈をしていると、イーグルトンは断じている。ところが彼は、先の引用文においては、ロレンスが「文化と社会」の系譜を直接引き継ぐ者であって、産業資本主義体制を糾弾した今世紀最大の人物であると要約している。

この要約は、どことなく奇妙な印象を与える。というのは、ウィリアムズの主張する「文化と社会」の系譜にロレンスは確かに入るが、「反動的な」ロレンスを「社会主義ヒューマニズム」に連なる人物としてウィリアムズが無理矢理歪曲して解釈したと、イーグルトンは断じていた。それにもかかわらず、この要約では、なぜロレンスを、産業・資本主義社会を最も痛烈に批判した人物であると、イーグルトンが評価するような形で捉えているのかが疑問となってくるからである。さらに、ロレンスはプロレタリアートの出身であるが故にまさに階級的にも、「血」の上からも、「社会主義ヒューマニズム」の視点から見た「有機体」的な共同体に生きてきた人物であると、イーグルトンが受けとめているようにも読めるのである。奇妙な印象を受ける原因は、イーグルトンがカーライル、アーノルド、ロレンスたち3人に関して「反動的」であるという思想面での共通性を前提にして論を展開している点にある。つまり彼は、カーライルたち3人に対するウィリアムズの扱い方を非難したが、その場合3人の階級的な違いをことさら問題にすることはなかった。しかしながら実際のところ、ロレンスとアーノルド、カーライルは階級的に決定的に異なっていたのである。言い換えれば、ある時点では思想面のみの共通性に焦点を当てて論じながら、次の時点では階級面での違いに焦点を当てて論じているため、結果として奇妙な印象を与えることになったのではないかを思われる。そこにロレンスの二重性や矛盾があり、彼を評価する場合のむずかしさがある。イーグルトンもその「むずかしさ」を明断していないようである。

確かにロレンスは「有機体論」者であった。ところが彼がイギリスのロマン主義の影響下で「有機体論」を信じたとしても、それが単に「美学的な」視点からその論を信奉しただけでなく、プロレタリアートとしての彼固有の体験が彼に「有機体論」を信じさせる重要な要因になっているため、彼が「有機体

論」者であったと言う場合も、他の作家たちと同一の基準で裁断することは危険である。イーグルトンは、ロレンスが国外追放者としてイギリスやヨーロッパを後にして世界を彷徨い、「有機体」的な秩序を探し歩いたと述べているが、ロレンスが世界を彷徨い歩いた理由の一つには階級の問題が、その背景にあることは明らかである。それをイーグルトンは簡単に「社会的に」という言葉で表わしたのだと考えられなくもないのである。

もちろん、ロレンスが「美学的」にも「有機体」的世界を作り上げる試みをしたことをイーグルトンは認めている。ロレンスは小説そのものを「有機体的統一」であると信じ、そのことをエッセイなどで主張しただけでなく、実際「有機体」的な小説世界を創出しようと試みた⁸⁾。イーグルトンが「比喩的な形で、小説という形態そのものを用いて」と記しているのは、ロレンスの小説における試みを認めていることを明白に示している。

ところがこのロレンスの試みはすでにF. R. リーヴィスたちスクルーティニ派の人々が高く評価し、彼らの運動を支える重要な役割を果たしてきたものであった。リーヴィスたちは、彼らが登場する以前のイギリスの大学などでもっばら行なわれていた旧態依然たる、基本的には個人的な好みや嗜好に依拠する「吟味・味読」中心の文学研究を徹底的に批判した。リーヴィスたちは「リベラル・ヒューマニズム」を信奉する中産階級の出身であり、新たな価値大系の確立を目指し、いわゆる「実践批評」に辿り着いたのである。彼らが試みたのは、「生きた」体験に基づいて古いものを新しく捉え直すことであった。彼らの「体験」理論を支える「メタフィジックス」としてロレンスの小説が選ばれたが、その理由はロレンスが「感覚的経験主義」を不要なものとして切り捨てることなく、むしろそれを重視し彼自身の存在論においても高い地位を与えていたからだ、イーグルトンは説明している。しかしながら、スクルーティニ派の人々は、ある時は「感覚的経験主義」に基づいて、まるで絶対主義的な理想主義に立っているがごとくに、イギリスの功利主義的な経験主義を徹底的に非難したかと思うと、今度はイギリスの伝統的なリベラルな経験主義に立って、「絶対化」され硬直化した（マルクス主義も含めて）組織や体制を攻撃し

たと、イーグルトンはスクルーティニ派の一貫性のなさを非難している。ところが、このようにイーグルトンは非難しているが、リーヴィスたちの試みが20世紀の文学批評に大きな影響を与えたことは否定できないし、先程「比喩的な形で、小説という形態そのものを用いて」とわざわざイーグルトンが付け加えるをえなかったところに、彼のリーヴィス批判にもかかわらず、リーヴィスの影響を無視してロレンスを論じることの厄介さが垣間見られるように思われてならない。

イーグルトンは、「有機体論」者としてドグマを嫌い「生」の流れを重視するロレンスと、他方、形而上学的なドグマに取り憑かれ「生」の絶対論者のごときところのあるロレンスと、二人のロレンスがいることを指摘している。また「生」の有機体的な創造の価値をなによりも大切に思いながら、C. クラークが捉えたごとく⁹⁾、「生」の崩壊に魅惑されるところも、ロレンスにはあると述べている。そしてこういった相矛盾する二面性にこそロレンスという作家の「歴史的な」重要性があると、イーグルトンは主張している。つまり、ロレンスが相矛盾する二面性を持たざるをえなかったのは、彼が直面した「矛盾」こそ19世紀以来イギリスの社会が直面してきた問題であり、ロレンスの「矛盾」をきちんと捉えることこそ19世紀から20世紀にかけてのイギリスの文化と社会の矛盾を理解するための重要な作業であると、イーグルトンは考えているからである。ここには、「個」の意味を「歴史」の視点から捉えようとするイーグルトンのマルクス主義的な視点が明確に示されている。

*ロレンスにおけるロマン主義とヒューマニズム

さらにイーグルトンはロマン主義的ヒューマニズムの伝統を引き継ぐとされるロレンスの問題を取り上げている。それは、ロレンスの作品にはロマン主義的なヒューマニズムの伝統が胎んでいる問題がこの上なく明白に露呈していると、イーグルトンが考えているからである。この問題は、言うまでもなく、「個」と「総体」の問題である。ロレンスは「有機体的秩序」に基づく「総体」を希求しそのあるべき共同体世界を必死に模索した。ところが他方、一個

の「有機体」としての「個」が己れの内発的な力によって有機的に欠けるところのない「全きもの」として成長し成就することを願ったのである。この「個」としての自己成就という考えはもともとブルジョワ個人主義を理想化したところから生じた概念であったが、それが極端に推し進められていくと、『虹』のアーシュラを通して描かれたごとく、ブルジョワが作り上げ、「現実化」させた社会に対する革命的な反逆となってしまうことになる。つまり「個」に本来内在する独自性を発揮させようとする、今度は社会という「個」を超えた秩序が「個」を抑圧することになる。たとえその社会が「有機体的秩序」を持つ共同体的社会であっても「個」を抑圧する状況が生じることになり、「個」が己れの「有機体的統一」を達成しようとする、「有機体的秩序」である社会と真っ向から衝突する事態になってしまう。もちろん、ロレンスの考える「有機体」としての共同体社会は、一人の人間は巨大な社会機構を支える単なる一構成分子であり、機械の部品にすぎないとする産業資本主義的な社会ではない。とはいえ、ロレンスの考える社会の像からは、ブルジョワのリベラルな伝統が排除されていない。言い換えれば、「私的」なものを重視する「共感」「親密さ」「思いやり」といった価値が取り入れられており、ロレンスの「有機体」的社会像にあっては、ブルジョワのリベラルなイデオロギーが徹底した形で否定されていない点に大きな矛盾があると、イーグルトンは解釈している。

このようにブルジョワのリベラルなイデオロギーの矛盾がロレンスの「個」と「総体」の問題に鮮明に表れている点を、イーグルトンは指摘した上、さらに第1次大戦によって、ブルジョワのリベラルな伝統が依拠してきた「共感」や「思いやり」といった価値が崩壊し、その崩壊がロレンスに与えた影響について次のように捉える。つまり、ロレンスが、リベラルな伝統を支えていた「愛」に基づく社会を見捨て、いわゆる「規律」や「秩序」、「行動」を重視する「力」、ロレンスの言葉では「闇の神」に依拠する有機的な社会への志向を強めることになったのは、明らかに第1次大戦の影響であると、イーグルトンは考えている。その影響を見るために、リーダーシップ期のロレンスの作品

について、イーグルトンは検討を加えている。

イーグルトンは、「共感」や「性的な面での親密さ」を重視する「女性原理」を否定し「力」を重視する「男性原理」に基づく社会を志向するロレンスに対して、「ロレンスはファシズムの主たる先駆者」であったと述べている。だが、そうとはいえ、ロレンスが無条件にファシストのイデオロギーを受け入れていたとは言えないとも述べている。その理由として、ファシズムは無機質で無秩序な競争状態を是とするブルジョワの自由主義に対して、有機体的な秩序を尊重するロマン主義からの反撃として意味があるとはいえ、同じロマン主義の貴重な伝統である個人主義をファシズムが徹底的に否定した点を挙げている。ここにもロレンスには二元に分裂し対立する要素があることを、イーグルトンは見出している。

イーグルトンは、ロレンスのこのような分裂・対立する二元主義の源を彼の生い立ちに求める。プチ・ブルジョワの母とプロレタリアートの父。本来、原初の官能の統合された世界であるべき母が「意識」と理想主義、観念主義を積極的に目指したのに対して、父は絶えず受け身の立場にあって寡黙で、官能、感覚の世界に生きていた¹⁰⁾。この母と父のあり方は一般的なあり方とは逆の形になっている。ロレンスにとって、母は、父に真の「男性性」を持つことを禁じる働きをしたとして恨みの対象ではあったものの、他方「愛や優しさ、二人だけの親密さ」を表わすかけがえのない貴重な存在でもあった。ここでもロレンスの相反する心理的な矛盾が表れている。しかしながら、この母と父との逆転した役割を本来の形に戻そうと、ロレンスは父の復権を試みるのである。リーダーシップ期の3作はまさにこの父の復権への試みであると、イーグルトンは考えている。それらの作品で、ロレンスは、ヒステリックに男性優位主義を唱え、「力」に依拠する「男性性を讃える密儀」を守るために女性原理の中核である「性愛」を厳しく拒絶する男たちを描き出したのだが、やはりこの女性に対する憎悪についても、これまでと同じく二元的な態度が見られると、イーグルトンは指摘している。ロレンスの女性に対する憎悪は、ブルジョワのリベラルな価値観への反発から生じてきているものであったが、同時にそれは「個人

の自律性を貶めるセクシュアリティの罠」を避けようとする反応でもあった。このようにロレンスは一方でセクシュアリティの罠を非難しながらも、他方このセクシュアリティを「社会再生」の源泉とみなし、セクシュアリティに深く傾斜し、その価値を説くのである。こういったロレンスの二元的な矛盾に満ちた問題の融合が行なわれたのは、『チャタレー卿夫人の恋人』においてである。リーダーシップ期から晩年にかけてのロレンスの小説群の検討の後、イーグルトンは、メラーズによって復権がなされた父の像が描き出され、男の「力」と女の「優しさ」、プロレタリアートの荒々しさとプチ・ブルジョワの「意識」を「神話的に」解決していると、解釈している。

*イデオロギーと作品の形態

最後にイーグルトンは、絶えず相反するイデオロギーに支配され苦闘したロレンスとその苦闘をどのように表わしたのかについて、要約的に語っている。ロレンスを支配したイデオロギーには、プロレタリアートの要素とプチ・ブルジョワ的な要素が混じり合って入り込んでおり、それは「力と愛」「共同体と自律した個人」「官能と意識」「秩序と個人主義」という相対立する形をとって表わされてきた。もちろんこういった相対立するイデオロギーといった捉え方はロレンスの出世作『息子と恋人』から最晩年の『チャタレー卿夫人の恋人』までを俯瞰的に見た上での集約的な要約であって、それぞれの作品についてはその時代によって重点が異なっているのは、言うまでもないことである。イーグルトンが特に注目しているのは、第1次大戦がロレンスに与えた影響の大きさである。大戦後、ロレンスは自分を支える明確なイデオロギーを見失った状況に陥ってしまい、その混乱状況は、彼の小説の表現技法が実に多様な形をとっている点にも見出されると、イーグルトンは主張している。

第1次大戦までは、ロレンスにとって、イギリスの産業・資本主義社会がどれほど非難の対象であろうとも、例えば『虹』で描かれたように、社会そのものにはまだ「有機体」的な世界を保持する伝統が残存していて、その復活の可能性を信じることができた。しかし大戦中のすさまじい体験によって、ロレン

スはその可能性を信じていられなくなり、イギリス社会を捨てテラシネとして世界を彷徨い歩くことになる。イーグルトンは、ロレンスの小説のスタイルが大戦を境にして大きく変わり、特に『アロンの杖』や『カンガルー』などは「語り」が一貫せず、断片的な記事や自伝的な要素が実に多く混入されている。それは、明らかに、ロレンスのイデオロギーそのものが一貫性を失ってしまったが故であると、述べている。イーグルトンは、このようにイデオロギーと作品の表現形態とのかかわりに焦点を当てて見ていくのであるが、1970年に出版された『エグザイルとエミグレ』で行なわれた『息子と恋人』や『虹』に関する解釈と本書での解釈はほとんど変わっていない。ところが『恋する女たち』については、少々異なった解釈になっている。近年、『恋する女たち』が、いわゆるポストモダン的な視点からも注目すべき作品として、その小説技法について論じられることが多いが、イーグルトンの解釈も先駆的な試みの一つとみなしてもいいのかもしれない。

イーグルトンは、大戦中に書かれた『恋する女たち』をロレンスが戦前のイデオロギーの崩壊に直面し苦闘した作品と位置づけている。従来、『虹』の姉妹編とみなされ、思想的、文化的背景も両者の間にそれほど大きな違いはないと思われてきたところがあるが、イーグルトンはそういった思い込みを打ち砕こうとしている。『恋する女たち』では、『虹』で用いられた「通時的なリズム」をやめ、「共時的」な形態によって書かれている。その結果生じてきたのは、作家のイデオロギーでもなく、一般的なイデオロギーでもない「テキストのイデオロギー」¹¹⁾というものである。そしてこの作品の特徴は「停滞と幻滅」であると、簡潔に要約している。この見解はウィリアムズが『恋する女たち』を「幻滅の傑作」と評価したことを思い出させるが、イーグルトンは、さらにこの小説の特徴として、ロレンスが「進歩的に」リアリズムとの結びつきを無理矢理に断ち切っていく点とすることを挙げている。このリアリズムとの断絶の問題は、ハーディがすでに『日蔭者ジュード』において深刻な形でリアリズムの行き詰まりを示した問題であって、取り立てて新しい問題ではないが、ロレンスも同じ問題に直面し「進歩的に」取り組んだと、イーグルトン

は考えている。

ハーディの場合、彼は、パストラル、神話、古典劇、それに虚構作品で用いられるリアリズムなどを、いわばごった煮の形で、掻き集めながらも、パストラルのイデオロギーに最高の地位を与え、他を支配させていた。『森の民』や『テス』において、ハーディは、入念にリアリズムを用いながら、パストラルというイデオロギーを中心に、これらの小説を形式的にも完璧な形で表わすことに成功した。ところが『日蔭者ジュード』においては、ハーディは、同じリアリズムに依拠する虚構という形態を使用して、リアリズムを極限まで活用するが、結局ドラマとしては「内的混乱と矛盾」を引き起こすことになったと、イーグルトンは解釈している。つまりリアリズムに基づく小説の限界が『日蔭者ジュード』において明らかになり、ハーディはそれ以降小説という様式を用いて書くことをあきらめざるをえなかったのである。しかしながら、イーグルトンはそこで小説が終わってしまったと主張しているわけではない。『恋する女たち』で示されたリアリズムの系譜との絶縁は、むしろ「進歩的」であり、発展的であると捉えて、『恋する女たち』を脱リアリズム、脱有機体志向の重要な作品として評価していると、筆者には思われるのである。

第10章の「結論」において、イーグルトンは、これまでのマルクス主義の伝統的な美学では、「有機体」的な全体に裂目を入れることが「進歩的」な行為であるとする見解など受け入れられることはなかったと、述べている¹²⁾。というのは、これまでのマルクス主義美学は、G. ルカーチの強い影響を受けてきたからである。イーグルトンは、ブレヒトがルカーチの「有機体論」や「閉鎖された形での均衡のとれた全体性」に反対し、「開かれた多様な形態」を主張した点を再度思い出すべきだと言っているが、この『イデオロギーと文学批評』における、19世紀以降のイギリス文学を支えてきた「有機体論」に対するイーグルトンの徹底した分析と批判は、マルクス主義批評が従来硬直した形での文学批評を脱皮し新たな方向に向かおうとする変化を端的に示す好個の試みであったと言える。

2 『文学理論入門』：マルクス主義批評と 精神分析批評の統合の試み

1983年に出版された『文学理論入門』の序文で、イーグルトンは本書において現代文学理論を、これまでそういったことに関心のなかった人々にも理解できるように分かりやすく説明したと述べている。最初から理論そのものに対して敵意を抱いている人々がいるが、彼らの敵意は他の人たちの理論に対して反対であるというだけでなく、敵意を抱いている人自身が自分の理論を持っていることを全く忘れ去っていることから生じているとも言っており、こういった心理的に歪んだ状況を正常に戻して、それぞれの読者にこれまで忘れていたものを思い出させようとするのが、本書の意図であると説明している。1996年に本書の第2版が出たが、その序文の結論のところ、文学理論は「エリート主義的な衝動」よりもむしろ「デモクラティックな衝動」によって形成されていることをきちんと理解するべきだと述べ¹³⁾、その理論が、どれほど大風呂敷を広げたような大袈裟な表現でもって書かれていようと、読むに耐えないものであれば、その理論が「歴史的根拠」に忠実でないことを自ら暴露することになると、エリート主義的な一人よがりの文学理論を非難している。この非難は、現代の多様な文学理論を論じる場合のマルクス主義者としての自分の立場を、イーグルトンは明確に示していることになる。こういった序文でのイーグルトンの意見でも明らかなように、本書は『文学批評とイデオロギー』に較べてかなり分かりやすい形で表わされている。もちろんそこには、イーグルトンの啓蒙的な意図が働いていたことは確かであるが、1975年から1983年にかけてのイーグルトンの思想上の深まりとともに、彼は「デモクラティック」に平易に表そうとすることがマルクス主義批評の普及にとって重要であると考えたからではないかと、筆者には思われてならない。

*L. アルチュセールとJ. ラカン

D. H. ロレンスについては、「精神分析批評」の章で取り上げられてい

る。イーグルトンがロレンスの『息子と恋人』という具体的な作品を取り上げているのは、社会と無意識とのかかわりという問題を検討しようとしているからである。「精神分析批評」の章では、イーグルトンはまずS. フロイトから論を起し、次にJ. ラカンを取り上げ、彼の「鏡像」のイメージをめぐって「想像界」と「象徴界」について論じ、このラカンの「想像界」の考え方がL. アルチュセールのイデオロギーの概念によく似ているとして、アルチュセールに関して論じていく。イーグルトンは、ラカンの考えた幼児と幼児の鏡像との関係がアルチュセールの考える社会全体と個人の主体との関係によく似ていると、捉えている。しかし、ラカン自身は、自分の理論が社会的な次元で有効に働くとは考えていなかったし、無意識の問題を通して社会の問題を解決しようとしていたわけでもなかった。つまり「精神分析」は基本的には個人の問題を解決するためのもので社会の問題に取り組むための手法ではないとみなされていた。アルチュセールの試みは、こういった従来からの考え方に対する一種の挑戦と言えるだろう。

アルチュセールは、個人というものは多様な社会的決定要因が作り出したものであり本質的な統一性など持ちえないと主張した。それゆえにアルチュセールは「構造主義的な」マルクス主義者であると、イーグルトンは位置づけている。そして個人と社会とのかかわりについてのアルチュセールの捉え方を次のように説明してくれる。ある面で、個々の人間は、社会においては、自分などいてもいなくてもいい正に断片的な存在であると感じているところがある。ところが他方、自分は社会や世界と有意義な関係を保持している存在であるとも感じている。それは、まるで自分を「中心にして」意味深く構成されているとも言えるような感じなのである。アルチュセールは、こういった自分が世界の中心であるといった感じ、言い換えると、自分と世界との確固たる結びつきに対する確信やそれに依拠して行なわれる無意識的とも言える行動などをイデオロギーであると言っている。個人が社会と有意義な関係を保持していると感じている場合、個人は自分の満足のいく統一されたイメージが社会という鏡に映し出されていると感じている。今度はその映し出されている統一されたイメ

ージがその個人に投げ返されてきて、個人はそのイメージに呪縛され「従属」することになる。そのイメージは、アルチュセールの言うイデオロギーであって、個人の好みや信念、無意識化された行動を支えるものなのである。

イーグルトンは、アルチュセールの試みにたとえ欠点があるにしても、それは精神分析学者たちの仕事が精神分析以外の領域においても活用できる可能性を開いた試みとして評価している。こういった評価が根底にあるが故に、イーグルトンはフロイト、ラカン、それにアルチュセールと結びつけて論じてきたのであって、そこにはマルクス主義批評の新しい方向を模索するイーグルトンの意図があるとも言えるのである。

＊『息子と恋人』解釈：無意識・階級・「サブ・テキスト」

具体的にイーグルトンの『息子と恋人』の解釈を見る前に、彼が数ある小説の中からなぜ『息子と恋人』を選んだのかという点について、とりたてて言うほどのことではないが、一応触れておく必要があるだろう。その理由は、『息子と恋人』がエディプス・コンプレックスを表わした作品であるという解釈が、ロレンス自身の手紙での説明¹⁴⁾やF. J. ホフマンの『フロイトの精神分析理論と文学的思考』(1945)¹⁵⁾、あるいはD. A. ヴァイスの『ノッティンガムのエディパス』(1962)¹⁶⁾などによって広く認められているからである。他方、この小説は労働者階級の生活を実に生き生きと描き出した作品として、イーグルトン自身も含め、R. ウィリアムズなどが取り上げてきた。しかしこれまでのところ、父と母と息子、さらに息子と恋人といった個人の次元での問題に焦点をあてて論じられた精神分析批評と、近代産業資本主義下における支配階級と労働者階級との対立の構図を背景に社会的次元から論じられたマルクス主義批評とは、それぞれの批評が基づいている理論や主義がどのような形で文学作品で具体化されているかを検証するための試みであったと言える。今回のイーグルトンの試みでは、彼は自分の信じている理論を正当化するため『息子と恋人』を取り上げながら、そこに別個の強力な理論体系を持つ精神分析批評を導入している。これは明らかに従来の試みとは異なるものである。彼は従来

からの一つの理論に基づいて行なわれる手法の限界を打ち破ろうと試みているのである。つまり精神分析批評とマルクス主義批評という二つの理論の融合が可能であるのかどうかを、『息子と恋人』という文学作品を素材にして試みようとしているのであって、異なった視点を併用しながらある種の実験を試みていると言わざるをえない。

イーグルトンは最初、ロレンスがフロイトの著作を意識して書いたかどうかは別にして、『息子と恋人』がエディプス的小説であることを紹介し説明している。エディプス的な葛藤を解決できず、ポールは成長しても女との間に充足した関係を持つことができず、母からの解放を願うと説明している。また、「母親殺し」とも解釈できる、ポールが母にモルヒネを多量に与える行為を「愛、復讐それに自己解放」のいずれとも言い切れない曖昧な行為であると解釈している。このように、イーグルトンは『息子と恋人』をめぐる代表的な精神分析批評を要約的に紹介した上、ポールのこういった心理的葛藤を彼が置かれている社会的状況と結びつけて論じていく。

モレル家では炭坑夫の父が働き、母は専業主婦として家庭に留まっている。この家族形態は、資本主義社会における「性による分業化」として知られている基本の形である。男親が労働者として酷使され、女親が家庭で夫と将来の労働力となる子どもたちを支える形となっているが、こういった役割分担では、母と子どもたちが感情的に密着し、父親が家庭から疎外され子どもたちとの関係が希薄となる。ここで述べられている労働者としてのウォルターの疎外のあり方について、イーグルトンは労働者の側に立ってすでに『エグザイルとエミグレ』においてかなり詳しく論じていたが¹⁷⁾、その論を再度簡潔に繰り返している。ただロレンスの描く炭坑夫像が精神を軽視し肉体の生を重視する「地底の生きもの」として描かれている点を、実に奇妙であるとイーグルトンはコメントしている。その理由として、『息子と恋人』が出版された頃、炭坑夫たちが前例がないほどの強力なストライキをうち、階級闘争の火の手が上がっていたのであって、これほどに組織的なストライキを実施しうるには、「地底の生きもの」として精神的世界に背を向けている炭坑夫にはできないことである

と、やや皮肉っぽい説明をしている。

イーグルトンは、精神分析の視点と社会的次元からの視点に基づいて解釈するために、主人公ポールと彼の父や母との関係を取り上げる。まずイーグルトンは、従来からの研究ではこの小説で何が書かれているのかという「テーマ」が重要視されてきたが、それよりもむしろどのように書かれているのかという「フォーム」の問題に注目するべきであると提言している。具体的に彼は、この小説の語りがどういう形で行なわれているかを見るために、ポールの視点について語っている。『息子と恋人』においては、かなりの部分がポールの視点から語られているが、その視点は父よりも母に向けられることが多く、母の内面が多く語られることになる。そのため母が目立つ存在となり、父は目立たない結果となっている。イーグルトンは、こういった語りの構成はポールの「無意識と共謀する」形をとっており、いわば偏向した人物の描き方がなされていると解釈している。ところが他方、父が楽しげに大工仕事をする場面などでは父の生き生きした姿がドラマティックに描き出されていたり、母の厳しい容赦しない性格（例えばノッティンガムのジョーダン社へ母子で面接に出かけた帰り道に立ち寄った喫茶店での母の態度はその一例と考えられるが）を徹底的に描き出すことによって、ポールが偏向的に描き出した父と母の像が否定されていると、H. M. ダレスキーの解釈を援用しながら、イーグルトンは主張している。そして、ここにはエディプス・コンプレックスにおける男の子が父に対して抱く、無意識のうちに父を憎んで攻撃しながらも同時に父を愛し守ろうとするアンビヴァレントな気持ちが示されていると、イーグルトンは解説している。

次にこのアンビヴァレントな気持ちに関連させて、イーグルトンは階級問題を軸に社会的な視点から論じていく。ポールは視野の狭い粗暴な父の労働者階級の世界を捨てて、視野の広い教養豊かな母の中産階級の世界に入ろうとする。ところが母の人物像によって表わされる中産階級意識は確かに価値があるとは思いつつも、そこにある生命を否定し他の存在を自分の思いのままにしようとする強固な支配欲を受け入れることができない。それ故ポールは、社会

的な面においても、父と母とが表わすそれぞれの階級に対して攻撃しながらも同時に擁護するといったアンビヴァレントな状況に陥ってしまう。このようにポールのアンビヴァレントな状況に焦点を当てて、イーグルトンは精神分析の視点と社会的・階級的な視点という二つの視点からポールの問題を論じている。

最後に『息子と恋人』において「書かれていないもの」が何なのか注目すべきであるとイーグルトンは語っている。特に『息子と恋人』においては、母の強烈な所有欲や支配欲に対してポールが厳しく批判しないような形で描かれている点について注意するように述べている。なぜなら、小説の下層部には「サブ・テキスト」が隠されており、それを読み解くことが重要であるとイーグルトンは考えているからである。この考えは『文学批評とイデオロギー』において、イーグルトンが「批評の役割」とは何なのかについて説明していたところにも表わされていた。彼は次のように書いていた。

意味が充満した統一体として構成されていない文学のテキストには、あの「不在」の印が明確に刻み込まれており、そこでは「不在」がさまざまな意味作用を捻じ曲げ葛藤と矛盾を作り出す。このような「不在」——作品が「語っていないもの」——は、まさしく、作品を作品自身の持つイデオロギーの問題点と切り離しがたく結びついているものである。イデオロギーは雄弁なる沈黙という形でテキストの中に表れている。となると、批評の仕事とは、テキストの同じ場所に立ってテキストに語ることを許し、わざわざ語らないで放っておいたところを補って完全なものにすることではない。そうではなくて、作品のまさしく不完全なところにしっかりと身を落ち着け、作品を理論化することこそ批評の役割なのである。理論化とは、「テキストが語っていないもの」のイデオロギー上の必然性を説明することである。というのはこの「テキストが語っていないもの」こそ作品がよって立つ作品の主体性を構成しているからである¹⁸⁾。

イーグルトンは『息子と恋人』において「テキストが語っていないもの」を「サブ・テキスト」と呼び、それに注目するように主張していると考えられる。彼はそれを作品そのものの「無意識」であるとも言っている。繰り返しになるが、イーグルトンは、小説自身が冗舌とも言えるほどに語る場合、明らかにそこには逆に語らないで隠そうとしているものがあり、それが何であるのか探り出すことが重要であると主張している。そして、それを探り出す鍵は、精神分析批評にあるのではないかと示唆しているのである。

イーグルトンのこの精神分析批評とマルクス主義的批評との融合の試みは、ある意味では、まさしくポストモダンのとも言える多元の視点に基づく新たなマルクス主義批評の構築の試みであるとも言えるかもしれない。確かにここには一つの批評理論にこだわらず多元的な地平に立って何らかの新しい批評の地平を見ようとする試みが見られる。しかしながら、彼の文学批評に対する態度を考えると、必ずしも彼の試みを簡単に新しい地平を見ようとする試みだと言い切れないところがある。むしろそういった試みを否定しているのかもしれないのである。

『文学理論』の結論である最終章「政治的批評」において、イーグルトンは「批評方法の多元性は祝福すべきことであり、あらゆるものを受け入れる寛大なポーズをとり、単一の批評理論に基づく専制的な体制から解放されたことを喜ぶべきだろう」¹⁹⁾と、やや皮肉っぽい調子で語っている。彼が皮肉っぽく語らざるをえないのは、明らかに彼が主張したい点が全く別のところにあるからである。とはいえイーグルトンは、マルクス主義理論がいつ語られるのと待ち構えている読者も多いだろうが、自分は本書で必ずしも自分の文学理論を提示しようなどと考えてこなかったもので、期待はずれであったろうと述べており、彼の目的は必ずしもマルクス主義批評の優位性を主張するためではなかったことを明言している。彼はこの書で現代の文学理論を紹介してきたが、彼の意図は、そういった理論はわれわれの時代の政治史やイデオロギー史の一部であり、当事者が意識しようとしまいと、それらが政治的にならざるをえないことを明らかにしようとするところにあったのである。現代の文学理論は生々しい

現実から逃避し、非現実な領域を彷徨う以外にないと、実に否定的な捉え方をしている。彼が他の理論に較べてフェミニズム文学批評やマルクス主義文学批評などのほうに価値があると認めるのは、それらは現実を逃避せず、単なる記号論に墮していないが故に評価していると考えられる。彼の主張の根底には、文学そのものを従来からの狭い領域に留めておかず、より広大な領域のなかに置くことによって、現代の文学批評が押し込められて閉塞状況に風穴が開けられる可能性があるのではという思いがあると言ってもいいだろう。

イーグルトンは、基本的には、後期資本主義が深化した状況にある現代社会が生み出した、多元性を基本原理とする無目的的なポストモダニズムを受け入れていない。1996年に発表された『文学入門』第2版の「あとがき」や同年に出版された『ポストモダニズムの幻影』に見られるように、イーグルトンはポストモダニズム的な方向で問題の解決を見出そうとはしていない。とはいえ、単純にマルクス主義的な方向こそ進むべき道だとも言っていない。現在、「マルクス主義が生きている政治的実体」であり、「社会変革は非常に遠い先のことではない」などと主張することは「知的な面で正直ではない」だろうと言いながら、他方そうかと言って、公正な社会のヴィジョンを断念し、現代社会のぞっとするほどの混乱状態をそのまま黙認していいとも言えないと、イーグルトンは述べている²⁰⁾。彼は、普遍的な絶対的価値が見失われてしまった現在の状況が歴史的にも否定しようのない形で自分を取り巻いていることを明確に認めながらも、その状況を黙認できず混乱を收拾しうる何らかの秩序めいたものを構築しようと、主張しているのである。この主張は、ポストモダニズムの大きな潮流を「鏡」として、イーグルトンが自らをそこに映し出し己れの「全一」なるヴィジョンを見出そうとする試みであるかのようである。

このようなイーグルトンの壮大な主張からすると、彼が『息子と恋人』を用いて行なった試みはある種の知的な遊戯であったとも言えるかもしれない。一元的なマルクス主義的な立場にこだわらず、一時的に多元的なポストモダン風の立場に立って軽い気持ちで試みた実験であって、若い頃に書かれた『エグザイルとエミグレ』や『文学批評とイデオロギー』でのロレンス論とはかなり異

なったタッチで書かれたロレンス論であると、筆者には思われてならない。

註

- 1) 本稿は、「D. H. ロレンスとマルクス主義批評」という一連のテーマに基づいて論じてきたものの一部である。これまで発表してきた拙論を参考のために以下に記しておく。「D. H. ロレンスとマルクス主義——C. コードウェルの場合——」『同志社大学英語英文学研究』68号（同志社大学人文学会，1997），pp.193-218。「D. H. ロレンスとマルクス主義批評——レイモンド・ウィリアムズの場合——」『同志社大学英語英文学研究』70号（同志社大学人文学会，1998），pp.78-110。「T. イーグルトンのD. H. ロレンス解釈——己れの文化から逃げ出した男——」『言語文化』2巻1号（同志社大学言語文化学会，1999），pp.21-43。
- 2) T. Eagleton, *Criticism and Ideology: A Study in Marxist Literary Theory* (London: Verso, 1978; 1986), pp. 21-43. コードウェルについては実に短く、ウィリアムズについてはかなり紙面を割いている。
- 3) *Ibid.*, p. 24.
- 4) *Ibid.*, p. 157.
- 5) Cf. J. Childers & G. Henzi (eds.), *The Columbia Dictionary of Modern Literary and Cultural Criticism* (New York: Columbia Univ. Press, 1995), p. 215.
- 6) ウィリアムズの「文化と社会」については、拙論、「D. H. ロレンスとマルクス主義批評——レイモンド・ウィリアムズの場合——」『同志社大学英語文学研究』70号，pp. 80-88. を参照されたい。
- 7) T. Eagleton, *Criticism and Ideology* p. 157.
- 8) ロレンスは、彼の小説論とも呼べるエッセイ、「小説に手術を、さもなくば爆弾を」、「芸術とモラル」、「モラルと小説」、「なぜ小説が大切か」において、小説は有機体的な生命を持つ存在として捉え、その価値を主張している。
- 9) Cf. C. Clarke, *River of Dissolution: D. H. Lawrence & English Romanticism* (London: Routledge & Kegan Paul, 1969)
- 10) 拙論、「T. イーグルトンのD. H. ロレンス解釈——己れの文化から逃げ出した男——」『言語文化』2巻1号，pp. 27-35. を参照されたい。
- 11) T. Eagleton, *Criticism & Ideology*, p. 99.
- 12) *Ibid.*, p. 161.
- 13) T. Eagleton, *Literary Theory: An Introduction* [Second Edition] (Oxford: Blackwell, 1996), p. viii.
- 14) 例えば、1912年11月19日付けのE. ガーネット宛ての手紙で次のように書いてい

る。 "... She has had a passion for her husband, so the children are born of passion, and have heaps of vitality. But as her sons grow up she selects them as lovers—first the eldest, then the second. These sons are *urged* into life by their reciprocal... The son loves the mother—all the sons hate and are jealous of the father. The battle goes on between the mother and the girl, with the son as object." J. T. Boulton (ed.) *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. I (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1979), pp. 476-7.

- 15) F. J. Hoffman, *Freudianism and the Literary Mind* (Ann Arbor: Louisiana State Univ. Press, 1945)
- 16) D. A. Weiss, *Oedipus in Nottingham: D. H. Lawrence* (Seattle: Univ. of Washington, 1962)
- 17) T. Eagleton, *Exiles and Emigrés: Studies in Modern Literature* (London: Chatto and Windus, 1970), p. 192.
- 18) T. Eagleton, *Criticism and Ideology*, p. 89.
- 19) T. Eagleton, *Literary Theory*, p. 172.
- 20) T. Eagleton, *The Illusions of Postmodernism* (Oxford: Blackwell, 1996), p. ix.